

(西暦) 2018 年度 博士前期課程学位論文要旨

学位論文題名

定年退職後に再び働く高齢男性が作業適応を維持するプロセス

学位の種類： 修士 (作業療法学)

首都大学東京大学院

人間健康科学研究科 博士前期課程 人間健康科学専攻 作業療法科学域

学修番号：17896606

氏名：船越 健太

(指導教員名：石井 良和 教授)

【はじめに】

首尾一貫した生活パターンに大きな変化をもたらす定年退職は、多くの高齢者にとって最も挑戦的な側面の一つである。定年退職後に再び働くことを選択した高齢者がどのようにその後の生活への適応を維持しているかの検討は、高齢就業者数、就業率が共に増加の一途をたどっている本邦における重要な課題の一つである。そこで本研究では、定年退職後に再び働く貧困状態にない高齢男性が作業適応を維持するプロセスを検討した。

【方法】

都内に所在するシルバー人材センターの協力のもと、そこで働く貧困状態にない高齢男性 15 名に対して、45~60 分程度の半構成的面接を一人 2 回ずつ実施した。面接の際にはインタビューガイドの他に自記式作業遂行指標、役割チェックリストも参考にし、現在の生活や定年退職前後の出来事、現在の仕事等について聴取した。面接内容は録音し、その逐語録を分析に用いるデータとした。

方法論的枠組みには、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いた。この方法ではデータに即した分析により、ある現象の説明力に優れた概念を生成する。同時に複数の概念からなるカテゴリの検討も行い、最終的に全体として限定された範囲内における人間行動の説明と予測が可能な動態理論の生成を目指す。分析の際は、研究する人間による解釈を言語化し、分析プロセスを明示することで結果の信用性を担保する。

【結果】

23 の概念、12 のサブカテゴリ、5 のカテゴリが生成された。定年退職後に再び働く貧困状態にない高齢男性の時間の使い方とそのバランスは、作業の取捨選択を中心として変動していた。作業の取捨選択は、自己の変化、仕事・環境との関係性の変動と相互に関係しており、彼らは時に作業を諦めたり、ためらうといった非統制的選択を経験しながらも、作業を始めたり、やり方を調整して従事するといった統制的選択を通して時間の使い方のバランスを均衡状態に維持していた。

【考察】

対象者は統制的選択を通して、自分の生活をコントロールできているという感覚を得ていると考えられた。このコントロール感は自らの生活を形作る上で重要な要素であり、この感覚を通して時間の使い方のバランスを保つことが作業適応の維持に寄与すると考えられた。高齢期における身体的な衰えをはじめとした様々な挑戦を迎えたとしても、作業療法では従事可能な形態で、かつ本来の楽しみや価値感、役割を反映する作業を提案したり、共同的に探索することができる。この作業の統制的選択の観点からの支援を通して、作業療法は高齢者が意欲や能力を活かしながら活躍することに貢献できると考えられる。